



---

---

## 部門研究1 2003年度第2回研究会

---

---

日 時 / 2004年1月24日(土)

会 場 / 同志社大学 東京アカデミー

発 表 / 加藤 隆 (千葉大学文学部助教授)

コメント / 小原 克博 (同志社大学神学研究科助教授)

### スケジュール

---

1:30~3:00 発表:加藤 隆「キリスト教と一神教の成立」

3:00~3:15 休憩

3:15~3:30 コメント:小原克博

3:30~5:00 討議

5:30~7:30 懇談会(自由参加)

---

### 研究会概要

加藤氏の発表は、古代イスラエルから近代に至るまでの西洋的な社会を、古代イスラエル、ユダヤ教成立以降、キリスト教の誕生、ローマによるキリスト教の国教化以降という四つに区分し、それぞれについて社会構造論的分析を行うというものであった。加えて、非西洋的社会構造として中国的社会の分析もまた行われた。一神教の再考という観点からすれば、加藤氏の発表の特徴は一神教的宗教を社会構造の構成契機として捉える点にあり、これは神学的、教義学的な一神教の捉え方、また宗教学的なそれとは異なる点である。人が一人の神を信仰するというのが一般的な一神教観であるが、これに対して加藤氏は、人が任意に神を選ぶことができないというところに一神教の基礎を捉えるのである。

今回の研究会の主題であるキリスト教に焦点を当てるならば、加藤氏の論の特徴は、キリスト教を「人による人の支配」と捉える点にある。ユダヤ教やイエスにおいては神による救済の対象は、ユダヤ教共同体(人類)全体である。また、ユダヤ教において人を支配するのは律法(聖書)であり、また、イエスにおいてそれは神である。ところが、イエスの死後ペテロ等を中心にキリスト教共同体が形成されると、救済の対象は特定の(例えばイエスに従うといったような)生活スタイルを共有する共同体に限定されることになる。つまり、そこでは特定の共同体と生活スタイルへの参与が救済の条件と考えられているのである。このような共同体は、聖霊を受けることによって神的に保証された指導者が、一般信徒に救済の条件となる生活スタイルを指導することによって成立する。地中海世界にキリスト教が広まり、キリスト教共同体が各地で成立するに伴って、それぞれの共同体が採用する生活スタイルは地域性を帯びてゆくが、加藤氏は生活スタイルの具体的内容や共同体ごとの差異は度外視できると述べる。聖霊などによって直接神と関係する人が、神との関係を持つことのできない人を支配するという社会構造こそがキリスト教を特徴付けているからである。この支配する人と支配される人という二重構造は、ローマにおけるキリスト教の国教化を経て、近代に至るまでの西洋社会の構造を規定しており、また、キリスト教における教派の乱立もこのような観点から説明が可能である。

以上のような加藤氏の発表を受けて行われたその後の議論では、一神教概念をどのように規定するかという問題に焦点が当てられた。加藤氏の社会構造論的観点による規定では、諸宗教の自己理解や神学の内容は度外視され、例えば、従来キリスト教を他の一神教的宗教から分かちと理解されてきたイエス



や神は、社会構造を維持するための道具に還元されることになる。しかし、逆にそのような具体的信仰内容を度外視することで生じる利点も存在する。信仰対象の分析から一神教概念を規定するという宗教学の方法は、そもそもキリスト教思想圏の産物であり、また、それに従って三つの宗教を一神教概念の下に包摂するという理解がユダヤ教やイスラームの自己理解と相違しているという点、さらには、ラディカルな一神教は実証的に獲得されるものではないというR.ニーバーの見解などを考慮するならば、加藤氏の観点は一神教概念の規定に関して、従来とは別の新たな方向性を示唆していると考えられる。

一神教概念をいかに規定するかは、今後の研究会においても引き続き検討されるべき問題であるが、加藤氏の観点に立つならば、今回の発表で全く言及されなかったイスラーム的社会構造を、キリスト教的形態からユダヤ教的律法主義への回帰と見るのか、それとも全く別の形態と見るのかという問題が差し当たり残された課題であろう。

(CISMOR奨励研究員・神学研究科 高田 太)



## 「キリスト教と一神教の成立」

千葉大学文学部助教授  
加藤 隆



本日、ユダヤ教からキリスト教にかけての一神教的態度をめぐる状況について、皆様とともに考える機会を与えられましたことを、感謝申し上げます。有意義な一時となりますよう、議論のために有意義な機会となりますよう、最善を尽くしたいと思います。(配布した)一つの表は旧約聖書にかかわるもので、歴史年表と旧約聖書の諸文書にかかわる年表からなっています。(もう一つの)新約聖書の年表も適宜参考にしていただければと思います。本日、一神教とキリスト教についてのテーマが私に与えられましたが、一昨年、これと重なるテーマで『一神教の誕生』という本を出しました。内容の重要などところをご紹介しながら、さらに考えを進めることかできればと考えております。

古代ユダヤ教、初期キリスト教をめぐるの、一神教的態度の成立についての考察を試みたいと思います。キリスト教が成立し、それが西洋世界で支配的になるわけですが、そのことについて、西洋的社会的構造においてどのようにキリスト教がうまくいったのかについて、古代から近代の流れの中で考えます。世界は西洋的な社会構造だけのような印象をもつ人もあるようですが、そうでない社会構造があるということで、日本型、中国型、インド型の3つの別の社会構造のあり方、——日本、中国、インドが実際にそうだと言いきることはできませんが、そこからヒントを得て考えた社会構造のあり方——を検討することを通して、議論の基礎になればと考えています。それぞれの社会構造の文明において、こういうタイプの社会ならば宗教的領域はど

ういう位置づけになるか、ということも考えていきたいと思っています。一神教的態度との関連も考えていきたいと思っています。紀元前の二千年世紀から現代に至る人類史全体を振り返ることになります。大きな枠組みをご理解いただくために、全体の流れを一気に説明するのは、ある意味で都合の良い面もあるかと思っています。ここで申し上げることは私の見方であって、これが唯一であるとか、絶対正しいと主張するつもりはございません。理念型を並べていくこととなります。多くのパターンを考えていかなければなりません。図を描いていきたいと思っています。

まず一神教について。テレビなどでは知識人となっているような方でも「一神教は排他的だ」と述べることもあるようです。勉強不足だからそういうことをおっしゃると思いますが、現象を見るだけならそう見えるかもしれません。そういう方たちの単純な理解では「多神教的な考え方は、いろんな神々がいていいじゃないか」と思っていて、「一神教的な人たちはその中の一つだけ選んで他を否定する」。なぜそういうことができるのか、こうした人たちにはわからないところに、根本問題があると思います。

一神教の基本は、人間の側が神を、ユダヤ教ではヤハウェだけを、選んでいる、ということであるという理解では不十分です。一つの神を選ぶだけでは、十分に一神教的ではない。根本は人間が神を選べない、ということです。そこがないと一神教的な態度は成立しないという、重要なことがあります。それを強調したいと思います。



人と神との関係は、神がいて、人がいて、その間の相互関係であると考えられるのが、一つの可能な考え方です。神の側が人間に働きかける。恵み、救いとして。人は神に対して、崇拝する。相互方向の関係があるのですが、その出発点がどこにあるかによって大きく態度が違ってきます。

人が出発点である場合には、人の側にまず要求がある。自分たちでできない何か、それを神に向かって、「崇拝」とは言いますが、実際のところは「お願い」とか「命令」をして、神がそれをやってくれる、ということになっている。恵みをくれと神に言って、神が恵みを与えることになっている。これがご利益宗教的な態度です。崇拝において神を敬っているようですが、つまるところ神に命令している。たとえば、大学に合格させろ、家内安全を保証しろ、お前ならできだろう、「やれよ」と神に命じて、神にやらせる。人が主人で、奴隷である神に命令するようなものです。

それに対して、神の側がまず恵みを与えて人が神を崇拝する場合は、神が中心である。イスラエルの民の唯一の神がヤハウェであるというのは、そういう精神に基づいています。

しかし、これでご利益宗教的な態度が克服できているかという点、そう簡単にも言えません。『一神教の誕生』では書いていないところですが、旧約聖書では「出エジプト」の出来事があったからユダヤ民族の神はヤハウェだということが強調されているわけですが、これだけではまだご利益宗教的です。「出エジプト」という出来事、エジプトでの奴隷状態から私たちの祖先は解放されたのだということ、それはつまるところ自分たちにとって都合がいいことを神がやってくれたんだ、ということです。だから、この神を崇拝するんだ、ということになっている。これでは、まだご利益宗教的です。こういう態度では、他にも神がいて、他の恵みをくれるならば、その神も自分たちの神にしてしまう。たとえばバアルという神がいて雨を降らせてくれる。結構な話じゃないか。

バアルも崇拝する。ヤハウェ崇拝をやめるわけではないけれども、バアルも崇拝する。こういうことが起こってくるわけです。

「出エジプト」のあと、イスラエル民族では王国がつくられます。それが南北に分裂して、北王国が滅んで南が残る。その南王国も滅ぶ。「バビロン捕囚」です。その後、ペルシア、ギリシャ、ローマと支配者が変わっていく。

紀元前13世紀の「出エジプト」において、ヤハウェという神がイスラエル民族の神となったわけですが、他の神々を崇拝するご利益宗教的な態度を克服することはできない。バアルとかアシュタルテ、そういう神々が聖書の中ではイスラエル人たちが崇拝することが大きな問題として採り上げられている。ヤハウェという神を崇拝するのですが、バアルも雨を恵む。アシュタルテも豊穡を司っている神である。そうした神々も、それぞれいいじゃないか、と認めるのが多神教的な態度です。

これが北王国では大きな問題になりました。オムリ王朝はリベラルな傾向があって、バアル崇拝も容認していた。それに対してヤハウェ主義者という勢力があって、エリア、エリシャたち預言者の活躍もあって、革命まで起こる。エヒウという人がオムリ王朝を倒して、ヤハウェ主義の民族国家をつくる。政治的にイスラエル民族はヤハウェを崇拝するのだと、国教を制定するわけです。かなり厳しいことをやったようですが、それでも多神教的態度を根絶できない。政治のレベルで民族主義的に「我々の神はヤハウェだ」と主張するだけでは、一神教的な態度の根本は克服できない。もちろん古代イスラエルの民族に、公式に、民族主義的に、王朝などが率先してヤハウェだけを神とするという態度が、まずあったということは重要です。イスラエル民族が無原則に多神教の民族だったら、その後の展開はないと思います。しかし、それだけでは不十分だということになります。

そうした中で、多神教的な態度が根本的に解決されることになる大きな出来事がありました。いろ



いろいろ考えて、これしかないとは今は今のところ思うのですが、それは北王国の滅亡です。アッシリアが強大になって、紀元前722年に北王国が滅ぼされる。南王国はその時、アッシリアの前では小さな国で、風前の灯ですが、国際政治の上でうまく立ち回って、とにかく独立は保った。ほとんど属国のような形だったようですが。

ところで戦争が起こると、近代においても古代においても、軍隊が出ていき、民と民が戦って、殺し合うこととなります。しかし古代においては、戦争は神と神との戦いでもあります。負けた側の神は死ぬわけです。

戦いに軍隊が出ていくわけですが、その前に「我々の神は、必ず我々を勝利に導く」と神託が下る。これから戦いに行こうという時、神にうかがいを立てると、「今回はどうなるか、ちょっとわからない」という答えがなされたのでは、やはり戦いに出ていけない。「必ず勝たせる」と神が保証してくれるからこそ、士気を高めて戦いに出向くこととなります。

ところが問題があります。それは敵も同じことをやっている、ということです。相手も、自分たちの神にうかがいを立てて、その神は勝利を保証している。そして両方が出てきて、戦いが行われます。戦えば、どちらかが勝って、どちらかが負ける。勝った方はよろしいわけです。勝たせると言った神によって勝利が実現したのです、分捕り品の一部を神殿に捧げるといったことを行う。負けた方は、困ったこととなります。

古代では、戦争に負ければ、基本的に民族は滅亡し、町は壊される。神殿も壊される。神を崇拜する社会的なまとまりがなくなります。こうして神がいなくなることとなります。戦争に負けると、神も死ぬのです。考古学の発掘などで石碑が出てきたりして、この民族の神はこういう神だったと復活する程度です。

しかし戦争に負けるということには、神学的にも

大きな問題があります。神は、勝たせると約束したのに、動かなかったのです。約束を実行してくれなかった。そうすると、負けた側で生き残った者たちは、どのような態度をとることになるか。常識的には、敵の神を崇拜することになります。なぜなら、敵の神こそが、「勝たせる」と言ってそして勝利を実現した神であり、自分たちの神は「勝たせる」と言ったのに、勝利を実現しなかった神だからです。自分たちの神は、頼りにならない。それで、相手の神に乗り換えることとなります。かつて敵だった民族の神を崇拜するようなドライなことができるのかと思われるかもしれませんが、20世紀の半ばにも、敵について厳しく批判していたのに、負けたとなると、敵だった者たちをモデルにしてうまくやっている勢力もありました。20世紀の半ばの例は、宗教的なことにまで関わるようなことかどうかは微妙かもしれませんが、いずれにしても、負けたら敵に学ぶということは、たいへん合理的なことです。全力を尽くして戦って、戦争をやって、負ければ、相手の方が優れていたということになります。その優れたものを学んでいくのです。たいへん合理的な態度だと思われま

す。戦争に負けて民族が滅ぶと、神もいなくなる。かつての神を崇拜する者がいなくなる。ヤハウェ崇拜も、王国が7世紀に滅んだ時、なくなっても仕方がないところでした。しかしこの時には、南王国がまだ独立して残っていました。南王国では、ヤハウェ主義が濃厚でした。ダビデ王朝の王は「神の子」「ヤハウェの子」とされていました。神殿もあります。与えられた領土は神の「約束の地」とされていました。アッシリア側におもねっていないのではないかという勢力もあったような感じが聖書で窺われます。しかしやはり、ヤハウェ主義が主流でした。しかし北王国が滅んだという、目の前の事実は消しがたい。ヤハウェは駄目な神であると考えざるをえない。駄目な神を崇拜することはできない。そこで神学的な思考が介入することになりました。どうしたか。「神が本当に駄目だから、北王国は滅んだのか」と考えたわけです。北



王国が滅んだのは、神が駄目な神だからではなく、他に理由があるのではないかと考えたのです。

その時に「契約」の概念が重要なものとなりました。人は神を崇拜し、神は人に恵みを与える、という義務と権利がある。戦争に勝たせるということ、民族を守る恵みを与えるということ、この救いを神は与えなかった。だから神は悪い、駄目な神というのが単純な論理です。しかし、もう少し考える余地がある。なぜ神は動かなかったのか。人の方の態度が不十分だったのではないか。

人がきちんとした態度をとって、それで戦争になって、その時に神は民を守らない。この場合には、神は頼りにならないということになるかもしれません。しかし神の前で人がいい加減なことをして、いざという時、神が守らないといけないといっても、神としては動きようがないわけです。

このように考えるならば、神が駄目であると考えずに済むわけです。こうした議論によって、神の「義」が救われたということになりました。

ここは重要なので、たとえで言います。リンゴを100円で買う。これは契約です。売り手にも買い手にも権利と義務がある。100円出せば商人がリンゴをくれる。くれないならこの商人は駄目な商人です。しかし、たとえば20円しか出してないのに、商人に向かって、お前はリンゴくれないではないか、と言うならばどうでしょうか。100円のリンゴなのに20円しかもらってないのでは、商人はリンゴを渡すことができません。この場合、商人が悪いのではなく、20円しか出さない買い手の方に問題があることになります。こういう契約の考え方をすることによって、「神が駄目なのではなく、人が駄目なのだ。人が崇拜を十分に行っていない。ならば神が動かないのは当然である」と考えたわけです。

こうして神は、正しい神、義の神ということになりました。神の前できちんとした態度をとれないことを、聖書の言葉では「罪」と言います。神の前での態度が不十分なわけです。こういうふうに考えるこ

とで、神は救われたと言うことができます。契約の考え方が、この時に初めて発明されたなどと言うつもりはございませんが、このときに契約の考え方が非常に大きな意義を持つようになった、というふうに言ってよろしいかと思います。「契約」の考え方は、人間の側、民の側が「罪」の状態にあるということとあいまって、いわばセットになって、ここに入ってきて重要な働きをするようになりました。私たちのヤハウェは戦争では動かなかったが、神が悪いのではない。悪いのは私たちの方だ。私たちに罪があるという考え方になったわけです。

こうした状況においては、神との関係は実質的な関係ではない、ということになります。民の側の神に対する崇拜は不十分である。民は「罪」の状態にある。十分な崇拜ができないことが罪です。神は動かない。ですから断絶です。人間が罪の状態にあるのでは、ヤハウェに対してだけでなく、他の神々にも、人間が多神教的に命令することもできません。他の神々にも人間の態度は不十分です。ヤハウェに対しても、人は何も有効なことができない。しかしヤハウェとだけは、契約の関係があります。人間が然るべきことをしたら、神も然るべく対応してくれるという契約があります。実質的には断絶しているけど、契約という関係だけがあるので、残っているのはヤハウェという神と民だけの関係です。ですから実質的には、人は神々の世界とは関係がなくなり、ただ「契約」という形でヤハウェとの関係がある、ということになります。自分たちは「罪」の状態にある。救われていない。こういう形が生じることによって、一神教の本質的な体制ができたということになります。人間にとっては、神と十全な関係を持って、恵みの中で生きることが最大の目的ですが、それができない。それはなぜか。罪の状態にあるからだということになります。

「罪」の反対概念は「義」です。神の前で正しくあることです。神の前で正しくあるにはどうしたらいいのか。これ以降、このことが最大の問題になってきます。何が義なのか、何が善なのか。その後の展



開では、ユダヤ教は律法主義の方に行ってしまいます。いろんなオプションがありうると思いますが、圧倒的に律法主義に移っていく。目立った出来事としては、まずバビロン捕囚の前の時代、南王国だけが残っていたヨシア王の時、この時にいわゆる「申命記改革」が行われます。理想主義的な掟が、王の主導でつくられます。これも一つの大きな試みです。しかしその後、バビロン捕囚が紀元前6世紀が生じます。独立国そのものが、なくなってしまう。それから、バビロン捕囚の後に、もう一つ目立った新しい現象が生じてきます。

バビロニアに壊された神殿を、ペルシア支配の時代に再建します。第二神殿です。それから聖書というものをつくります。聖書は神の言葉だと言われて高い地位を持っているのですが、聖書はそれ以上に正典として一字一句も揺るがさない絶対的な地位を持つ文書集となっていきます。なぜそうなったのか。これはとても重要な問題です。「神の言葉」であるだけでは、このような位置付けになるには不十分です。「神の言葉」は、他にいくらでもありました。モーセの「十戒」もある、「申命記」も神の言葉です。預言者の言葉も、そうでした。神の言葉はいろいろあってそれなりに尊重されていましたが、それだけでは正典とされるほどの絶対的な権威を持つには至りません。その理由については、この本(『一神教の誕生』)で説明を試みたのですが、一つはペルシアの権威を背景にしているからではないかと考えました。エズラはユダヤ人であって、ペルシアの高級官僚で、エズラの指導によって最初の聖書の核である律法の部分、モーセ五書ができあがるわけですが、これはペルシア当局の指示があってやっているフシがある。なぜかという支配民族はいろいろいる。アッシリアやバビロニアと違ってペルシアは、支配民族にかなりの自治を許すという画期的な政策を行いました。それぞれの言語を話してもよろしい。宗教も先祖伝来のものでよろしい。アッシリアやバビロニアが被支配民族を根こそぎにしていたのに対して、

一転したわけです。戦争に負けた者たちを、支配者があれこれと移住させて、全体として言語的にも人種的にもまぜまぜにしてもよかったわけですが、ペルシアはそうしなかった。しかし、自由を許すけれども、あまりに勝手にやられては困るわけですから、それぞれの民族に対してどういう規則で生活するかを文書にして提出しなさいと命令したわけです。ユダヤ人に対してだけでなく、少なくともエジプトでも同じようなことをやっていたフシがあります。後の時代のプトレマイオス朝も、似たようなことをやっています。当局側から「お前たちはこういう規則に従って生活しろ」と押しつけると、不満がたまって、場合によっては反乱になりかねません。そこで自分たちの規則を、自分たちにつくらせる。ユダヤ教にはかなりいろんな立場があって、まとめていくのは難しかったと考えられます。モーセ五書も、いろいろな立場が入り組んだものになっています。それでも何とか妥協に妥協を重ねて「律法」「掟」をつくるわけです。それをペルシア当局に提出する。一見すると、たいへん寛大な政策をしてくれているという雰囲気です。

掟というものは、どんなにうまく作っても、状況が変化すると変更の必要が生じます。ユダヤ人内部で処理できることなら、神の言葉であっても、たとえば「神は再び臨んで、こう言った」といった具合に掟を変更することができると思われます。しかし律法は、ペルシア当局に対して、自分たちが守るものとして届け出たものです。それを変更するためには、ペルシア当局の許可を得なければならない。自分たちの神の言葉を変更するのに異邦人の許可を得るなどということはできませんから、そこで動かせなくなった、と考えるべきではないでしょうか。解釈のところだけで、かなりの無理をしても対応していくという伝統が生じることになります。一字一句も動かさない正典が生じたきっかけは、ここにあるのではないのでしょうか。

しかしもう一つ問題があります。ペルシアが滅んでしまいます。しかしその後、聖書は絶対的な価値



があるものとして、ギリシャ、ローマの時代にいたっても存続します。むしろ、ますます価値は高くなり、安定します。その理由は何か。「知恵」の発達である『一神教の誕生』では議論をしました。

なぜ律法主義が絶対的になったか。神の前の義をめぐる新たな問題が生じたからです。神の前での義を実現するために、ユダヤ教の指導者たちは、律法をつくって、それを守りなさいと公式には民に教えます。それを守ろうとする人もいます。神の前での義を実現には他の方法もあると考えられるので、他のいろいろなことが試みられるようになる。民が文化的レベルが低い場合、——ヨシヤ王が申命記をつくった時、王の主導で掟をつくったことに端的に現れています——、民はまだ自分たちで考えるところまで行っていない。ところがバビロニア、ペルシア、ギリシャと接していくうちに民の全体的レベルが上がって、自分で考えるようになる。「私はこうこう、こうしているから、私は神の前で正しいんだ。救われるんだ」と自分の知恵で考える。それを主張する。神の前で救われないというところで、罪があって義になりきれない、どうすればいいかと困っている状況より、もっと問題が深刻で、重大です。人間が了解できる義とは何か。実行し実現できる義というものによってそれで救われるのだとしてしまうと、他の可能性を考えなくなるので、救われる可能性が閉じてしまいます。自分は罪の状態にある、義にならなければならない、と考えているうちは、まだ救われる可能性が残っている。何が善か、何が悪か、何が義であるかを決めるのは、神であるはずで、それを人間が自分の小さな知恵で考えて、何が善かを考えて決定し、それを実行して、「だから私は正しい。だから神を私を救うべきだ」と考えてしまいます。こうした考え方の根本にあるのは、人間のあり方を変化させることによって、それに対応して神が動くべきだという考え方です。これはご利益宗教と同じです。こういう儀式をしたんだから、生贄を捧げたから、神は豊作を実現すべきだ、戦争に勝たせるべきだ、大学に合格さ

せるべきだ。人間がこうしたんだから、神はこうすべきだ。しかるべきあり方を私は知っている、それを私はやったんだ、だから神はこうすべきだ。人間が神に命令していることになります。

人間が自分の知恵で善と悪を見分けることは、神でない人間が神のようになることです。人間が神のようになることは、たとえば「エデンの園」の話でも厳しく批判されています。アダムが追い出されたのは、知恵の木の実、善と悪を見分ける木の実を食べて、神のようになったからです。知恵の発達によって、神の前での罪の問題が、一重だったのが、二重に深刻になった。

これに対して有効だったのが「律法主義」だった、と考えられます。律法は、たいへんに複雑でわからないのです。まず物語です。物語が掟で、それを守れというのは、難しい。また読んで分かるような部分もありますが、どういうことが述べられているのかよく分からないところも数多くある。律法は分からないということの証拠として、ユダヤ教、キリスト教の学者たちが二千年以上の議論して、それでも結論がつかない、ということが決定的な証拠になっています。いろんなところで意見が分かれています。そんな状態なのに、一人の人が勉強して神の掟はこうなんだ、聖書の全部を理解して、それを完璧に実行するということは不可能です。寿命が尽きて死んでしまう。律法を守れば神の前で義となって救われるという体裁にはなっていますが、実際にそれを実行しだすと、まず理解できない。そして実行できない。つまり律法では、いつまでたっても救いが実現しないことになっています。そこが律法主義の意義であると考えられます。神の前で人間の知恵で、自分が自分を義してしまうことを避ける機能が律法にあるから、律法主義はますます堅固なものになったと考えられます。

そうした中で、新たな展開が生じてきます。それを窺うことができるひとつの傍証ですが、「黙示思





想」という考え方が紀元前2世紀ころから紀元後2、3世紀ころまで、まずはユダヤ教、それからキリスト教の周辺で現れまして、ある程度は流行しました。黙示文学を読みますと謎めいた言葉がずらっとお並んでいすぐには歯が立たないところが多くあります。しかし黙示思想には、大きな枠組みがあります。神がこの世をつくった。罪の考え方がありますからこの世は悪の世界です。この世は罪の状態にある、悪である。十分に善でないのですから、この世は滅ぼされるべきです。罪の状態にあるなら、罰を受けるのが当然です。どうも、「わたしは罪深いです」と言いさえすれば、それで正当化されるような雰囲気の一部にはあるようです。罪深いならば、死刑です。罪は死に至るのです。すぐに罰せられるはずですが。この世が悪ならば、神がつくったものかもしれませんが、滅ぼされるべきです。神がつくったのだから、神がそれを滅ぼすのも自由です。その時に、黙示思想の場合、神は新たな来るべき世、善なるすばらしい世界をつくとされています。黙示思想に忠実な人たち、ほんの一握りの人たちは選ばれています。現在の世が滅ぼされるのが終末ですが、終末の時に、そのほんの一握りの人たちだけは、来るべき善なる世に導き入れられるとされています。だから私たちは終末を待って、早く神がこの世を滅ぼせばいいと考えるのが黙示思想です。私たちの側に罪があるという考え方から、ある意味では自然に出てくる考え方かと思えます。それでも、こうした考え方が出てくるのは、北王国が滅んでから5世紀くらいたってからです。

黙示思想の問題として、二つの点を指摘すべきです。この世を滅ぼすことも、新しい世をつくることも、神がやることです。私たちには、することが何もありません。知恵の問題とか、私たちが毎日努力して正しい生活を送るといったこととは関係なく、救われる者は決まっている。となると、日々やることがない、という問題が生じてきます。もう一つは、終末がなかなか訪れないという問題です。今のとこ

ろ終末は訪れていないと言ってよろしいかと思えます。私たちは、罪の状態にあって義になることもできず、行き詰まったままの生活だということになっていて、現実是不変である。そして終末も訪れない。これが黙示思想の問題です。

エッセネ派が出てくることも重要です。ユダヤ人社会は、律法と神殿を背景として、律法主義者であるファリサイ派と神殿勢力であるサドカイ派を指導者として、その人たちの指導によって暮らしているわけですが、「律法を守りなさい、神殿に税を納めなさい、儀式をしなさい、ということで救いが実現するのか」と、少し元気な人たちが考えるわけです。律法を守るくらいでは救いは実現しない。それに業を煮やした元気な人たちは、こんないい加減な社会で暮らすのは嫌だといって荒野に退いて、自分たちなりの修行をしたり聖書を徹底的に勉強したり、沐浴のような儀式を徹底的にいたします。厳しいことをやるわけです。しかしこれも、それぞれ真面目なことだと思いますが、人間の側がこうしているから神は自分を救うべきだという方向での努力です。知識人を中心に大きな影響力があったようです。しかしエッセネ派的な実践から出てくる結論は、どんなに厳しくやってもそれは救いには至らない、ということだと言えらると思われます。修行によって救いを得ようとするのは、結局のところ人間が神に命令することですから、このような結論に至らざるを得ない。生ぬるいユダヤ人の社会に帰るわけにもいかない。しかし、修行の共同体生活を続けてもどうにもならないということになってしまいます。修行しても仕方ないことがわかるまで修行しなければいけない、という感じです。

そこで洗礼者ヨハネ、イエスが出てきたわけです。彼らが登場した時の状況は、私たちにはもう救われる可能性がないのか、といった行き詰まりの状況です。律法の努力の方向も修行の努力の方向も行き詰まりの状況にあり、終末も訪れない。

ただし黙示思想には新しい面があります。神は、



断絶していて、動かなかった。ところが黙示思想では、神は動く、とされている点です。ただし神は終末にしか動かない、と考えられています。神は、この世を滅ぼし、新しい世をつくる。神は全く沈黙しているのではない。神が動く可能性のあることに、気づき始めています。これは大きな発見です。黙示思想では「この世は悪である。だから滅ぼさなければならない」と考えられていました。しかし「果たして、この世は悪だから神はこの世を滅ぼさなければならない、と考えねばならないのか」と考えることもできる。この世は悪だから滅ぼさないといけないというのは、因果応報の考え方です。神がその理屈に縛られ、この世を滅ぼさなくてはならないとは限らないのではないのでしょうか。神は勝手に何をやっても、神なのです。この世は罪の状態にあるかもしれない。しかしそのような世を救うという方向で、神が介入するという可能性も考えられるわけです。いずれにしても、人間の側だけの努力ではどうしても、罪の状態から抜けられないのです。

このような考え方の方向において働きかけを行った最初の人、洗礼者ヨハネです。その次に、イエスが登場します。イエスは神の支配（「バシレイア・トゥ・テウ」）——これは、特にマルコに見られる言い方ですが——、この「神の支配」を問題にしました。神は動かない、沈黙しているばかりではない。何もしないのではなく、この世の世話をしてくれる。滅ぼすのではなく、肯定的に管理してくれる。「救う」と言ってもいいことです。神の権威は圧倒的に高いのですから、神がこの世にかかわるならば、それは支配という形にならざるをえない。人々——ユダヤ人——は、神と断絶していて、神なしの生活をせざるをえませんでした。ところが神が人にかかわることになる。イエスが出てきて、人々に何をしたかという、「神は<神の支配>という方向で、人々にかかわりますよ」ということを告知した、と言うことができる。メッセージを送ったのです。重要なのは神の状態です。沈黙していた神が、今度皆さんを救う

方向に動くのだと、使者がやってきて教えてくれた、ということです。

ところが大きな問題がある。神の支配、神のこの世に対する肯定的な介入が、全面的には生じていないという問題です。イエスは、神と直接的なつながりがある者だと考えてよいかと思われま。イエスだけでは、一人だけですが、それでも神とつながりのある者が現れたというだけで、たいへんなことです。神が全く沈黙していて、天は閉じていたところに、このようなことが生じたのですから。マルコのイエスの洗礼の場面で「天が裂けた」と書いてあります。「裂ける」ということは、それまでは「閉じていた」ということです。ただし「裂けた」だけ、少し開いただけです。イエスのところにだけ鳩が来た。他の人のところに飛んでこないわけです。イエスは「神の支配」という表現を使ったのかもしれませんが、「神の支配」はほんの部分的にしか生じない。これだけでも、たいへんなことですが、現実の大勢は変わらないのです。

「神の支配、王国」というと、共同体にかかわる言い方のように思われます。しかし神は、まずイエスだけを選んだ。それから何人の者を選んだのか、分かりませんが、人類全体を直接的に選んだのではないようです。

「神による選び」「神の支配」は、どのような広がりをもったものなのか、よく分からないところがあります。「国」「支配」という表現は福音書の表現ですから、イエスの立場をどれほどそのまま表しているか微妙なところがあって、疑おうとすれば疑えないこともありま。しかしイエスが「神の支配」について、ある程度以上の広がりをもって考えていたと思われる根拠がないわけではありません。それは、イエスが神殿で暴れたりする活動もしていると考えられることです。こうした派手な活動がおそらくきっかけとなって、イエスはユダヤ当局に睨まれることになり、捕まって十字架刑にかけられてしまいます。おそらくイエスは、神の支配がすべての人々に実現しないのは、律法主



義や神殿主義が障害となっていて、こうしたものがあるために神が人々と直接結びつかない、神殿や律法の権威を退ければそれで神の支配は実現すると考えたから、こうした行動に出たのではないかと考えられます。つまりイエスは、「神の支配」について共同体レベルで考えていたところがあります。しかし十字架事件が生じてしまい、イエスは排除されてしまいます。「神の支配」は、理屈としては、神が肯定的にこの世にかかわり得るということで、それだけでも大発見ですが、それ以上にはあまり展開しなかったということになります。一部の人、つまりイエスや、重要な弟子たちなどは、聖霊を受けて神と直接つながっているのかもしれませんが、ほとんどの人はそうではない。

十字架事件は、イエスの活動がこれで失敗して終わりとなってもおかしくない事件でした。しかしその後、弟子たちが活動を行います。弟子たちは、イエスがやったことをそのまま真似たものではありません。

特に重要なのは、ペテロたちがエルサレムに来て「エルサレム初期共同体」と呼ばれる共同体をつかったことです。この共同体には、ペテロや、その他の人々がいる。イエスは町や村をめぐって活動をして癒しとかをしていました。人々は、それまでの生活のあり方を特に変える必要はありませんでした。イエスの場合には、人々の側には、特別にやることはないのです。人間がどうにかしたから神が動くのではなく、罪の状態にある人間に神は恵みを与え、肯定的に関与してくるのです。神が救ってくれるのですから、修行したりする必要はありません。イエスの方が、あちこち回る。それに対してペテロは、全く違う方向での指導をしました。人々の間から、共同体のメンバーになる者が集められます。彼らは二十四時間一緒にいて、共同体をつくっています。寝て、ご飯を食べ、祈りをしたり、指導者の話を聞く。こうしたことが救いの保障になっています。これは何を意味しているで

しょうか。再びご利益宗教的な形に戻っていると云わざるを得ません。人間が特別な態度を示さねばならないのです。一般の、普通の生活ではなく、特別の生活をしなければならない。共同体のメンバーになる人たちと、ならない人では差が生じる。共同体のメンバーになる人たちは、それで救われるのか、救われる候補者になるだけなのか微妙ですが、共同体のメンバーにならない人たちは否定的に位置づけられることになります。共同体のメンバーになることがよいならば、そうしない者は、だめなわけです。そういう形の体制をつくったのがペテロです。

救われてない人たちの中で、救われたい人たち、そのような人たちは、救われるために何かしたい。何もしてもむだなのだとところからイエスは出発したはずなのですが、こうした人たちは、何かしたい。人間が何かをしたからといって神学的にはどうなるわけではありませんが、何かしたい。ペテロはこうした人たちに応えた、ということが出来ます。共同体をつくって、一緒にご飯を食べる、神殿でお祈りをする、お話を聞く。そのようにしていればよろしい、と指導しました。それでこうした人たちは、経済的、社会的にすべてを捨てて共同体のメンバーになる。新しい生活スタイルを求める。神の救いに見合ったとされている新しい生活スタイルをやっていたという人たちの要求に応じて、ペテロが教えました。ペテロの立場に反対しているマルコ福音書では、ペテロが批判されています。イエスはペテロを「サタン」と呼んで、ペテロは「神のことを考えずに人間のことを考えている」とされています。具体的には、共同体におけるペテロの指導のあり方が批判されていると思われます。

イエスは、最初に神と直接結び付いた人なのかもしれません。他にペテロ、後には、パウロ、ステファノといった人たちが、聖霊を受けて、個別的に救われている。他の人たちについては、神は直接的にこのような救いを実現しないようです。こうした事態に対してペテロは、共同体をつくるということを始



めたのです。そして、「イエスの神格化」ということが生じます。共同体をつくること、新しい生活スタイルをすること、キリスト教的な生活をする。それはイエスに従うことだとペテロは言ったと考えられます。イエスが生きていた時、ペテロがイエスに従って移動生活をしていて思い出が影響しているのではないかと思います。そういう思い出があっただけではありません。本当は神に従うべきです。しかし、イエスに従わねばならないとペテロが言ったのは、神に従うというと、ユダヤ教との関連で律法や神殿の権威も神によって保障されているものですから、神に従うなら律法や神殿も尊重しなければいけないという議論に対抗できなかったからではないかと思えます。「イエスに従うことは新しい生活をする。それは神に従うことだ」と教えたわけですから、それは神に従うことだ」と教えたわけですから、他のタイプの生活はだめで、エルサレム初期共同体の生活をしなければならないと教えた、ということになります。神が直接聖霊を通じて人々の一部を選んで救う、という状況になった。一部の人たちだけが、義とされたわけですから、パウロの言い方を借りるならば、聖霊を受けた人たちは「義人」です。その人たちは神に対して忠実な生活をするので、義人は信仰によって生きる。信仰を持ったから義人になるのではなく、義人ならば神にやっとな忠実になることができる。そこで当然、神に忠実に生きる。これが信仰です。

ところがエルサレム初期共同体における生活スタイルも、信仰の姿だということになっています。こうすればいい、ああすればいい、とペテロのような指導者が教える。イエスに従うことは神に従うことだ、それは具体的には共同体生活をする。ことだ、いわば外面的に指導がなされます。ペテロのような指導者、つまり人間が教えるところの、あるべき生活の姿、内面的な心の持ちようも含めた広い意味での生活スタイルが信仰だとされています。普通の生活はだめで、こういう特殊な生活をしなさい、ということです。

ところが、いろいろと犠牲をはらって実現していた共同体生活がいかに相対的なものかということが暴露されます。共同体生活が維持できなくなります。いろいろな問題が生じたと考えられます。たとえば、二十四時間、皆が一緒にいる共同生活をしなければならぬので、空間的な問題が生じたのではないのでしょうか。人数が多くなると、多人数と一緒に生活する空間が見つけれなくなったのではないのでしょうか。問題も考えるべきかもしれません。それに、本当にすべての者がエルサレムにいないとはならないのかという問題も生じたのではないのでしょうか。

それから、共同体のメンバーになれば、住むところが確保され、最低限の食べるものがあって、祈りなどをしていけば生活ができます。すると、多数の貧しい人たちがメンバーになるという問題が生じたのではないのでしょうか。この問題は、使徒行伝に示唆されています。共同体に加入するには、財産の全額を寄付しなければならないことになっていました。しかし貧しい人たちには、寄付するものは何もありません。すると共同体は、収入が増えずに、負担が増える、ということになります。

共同体がこのような状態になると、金持ちでメンバーになりたい人たちに動揺が生じてきます。共同体のメンバーになるには、全財産を放棄しなければなりません。共同体が破綻した場合、金持ちだった人は財産すべてを失って文無しで路頭に迷うこととなります。それが恐くて財産を全部寄付することに躊躇する、したがってメンバーにならない、という人たちが出てくる。こうした問題を前にして、たじろがない人もいるでしょうけれども、たじろぐ人も出てきます。そこで寄付の縛りが緩やかになります。財産の一部分を自分で所有したままでも、加入を認めることにします。

財産を持っていてもいい。好きなだけ寄付しなさい。そのようになると、それを誤魔化す人が出てきたりして、問題が生じてきます。共同体生活が維持できなくなります。エルサレムでは部分的には「貧し



い人々」が残るようですが、自分の家も持っているといった人たちも生じてきます。完全な共同体生活とは違う生活スタイルができるようになるわけです。

ペテロは初期共同体の理想主義的な生活がイエスに従うことだ、それが神に従うことだ、だから救われると教えたことになります。つまり特定の生活スタイルと救いが対応すると言っていたことになります。しかしこうした対応関係が事実上、維持できなくなります。救われるための特定の生活スタイルができないならば、それはイエスに従うことではないはずです。神に従うことではないと理屈ではそうなるはずなのに、違う生活スタイルでも、それで救われるのだと言い始めることになります。こうしたことを誰が言うのかというと、それは教会の指導者です。教会の指導者は聖霊を受けているという形になっていますが、教会指導者たちがある程度の受け入れやすい形の具体的な「活動」を指導します。こういう生活スタイルで、こういう信仰がよろしい、こういう文書を読みなさい、1週間1回、ミサに来ればいいんですよ、死ぬ前に油を塗ってもらえばいいんですよ、等々。ところが、キリスト教世界の全体を眺めると、こっちでやっていることは、あっちではやっていない。局地的に、一つのスタイルのところだけを見ると、勧められていることを絶対にやらねばならないように見えるけれど、別のところでは別のことをやっていて、それでもいいのです。そういうことを保障しているのは、キリスト教指導者です。ユダヤ教が律法による客観的な掟の方向を選んだといえるならば、キリスト教は、人による人の支配、つまり、キリスト教の指導者が人々に対してあれこれと指導して、そうした指導を守る、という形を選んでいえると思われれます。それぞれの場所での指導を守らない人たちが非キリスト教徒だという体制になっていく。聖職者が「救われている者たち」だという形になっている。彼らは本当に聖霊を受けているか。そうしたことは、本来的には神が判断することであって、人が判断

できることではないはずです。しかし聖職者たちは、公式には救われているとされている。そして聖霊を受けていない人々に、具体的な生活スタイルについての指導をする。こういう形で落ちついたのが、キリスト教ではないでしょうか。

キリスト教のこうしたあり方が、西洋的な社会のあり方と適合的だったのですが、それはどのようなことなのかという問題に移ります。これはまず、西洋的な社会を、どのようなものとしてとらえるか、という問題です。

そこで西洋的な社会は、基本的に二重構造になっていると考えることにいたします。アテネのポリスのような社会を考えますと、奴隷がいて、奴隷が働く。彼らは、家(オイコス)に属している。家には、主人(キュリオス)、つまり家長がいて、主人に絶対的に従っている。主人は奴隷の上に立っていて富がある。社会的に支配者の側に立っている。労働するのは奴隷たちで主人は働く必要がない。自由がある。勉強したり、ソクラテスと議論したりする。つまり、文化とか宗教の価値を手にすることができる。仕事をしていただけでは文化的な高い価値を本格的に獲得することはできません。自由人たちが、広場(アゴラ)に集まって、ポリス全体のこと、戦争とか公共事業について、相談をして決定する。つまり政治を行う。ポリティックを行うのは、自由人です。奴隷たちは、オイコスの領域にいるだけです。アリストテレスは奴隷のことを「アニメされたモノだ」と述べています。生物学的な人間をモノといった、メジャーな人は、アリストテレスくらいではないでしょうか。アリストテレスの立場には、厳しいものがあります。奴隷は、モノなのです。そしてオイコスの領域については、オイコスをどううまく経営するかが問題となります。オイコスのノモスが重要ですから、オイコノミア、つまりオイコスは経済の領域だということになります。世界は、経済の領域と政治の領域に分かれている、と考えられていることになります。日本は経済大国だということはすぐれた



奴隷だというようなもので、よく働き、ものを言わない、ポリスの領域に入っていない、このように位置づけられているところがあるかもしれません。ただし近代・現代では、富の意味が、古代とは違っているということがあるかもしれませんが。

ところが、こういう二重構造の形が崩れて参ります。このことにとって重要なのは、前4世紀のアレキサンダー大王の征服です。アレキサンダー大王は、瞬く間にインドに迫るところまで支配しました。ギリシア人が支配者側ですが、奴隷の領域にたくさん

の被支配民族が入り込んできます。主人は、奴隷に命令しなければなりません。とすると主人にも、管理という労働が必要ではないか、ということになります。しかし管理の対象の規模が小さいうちは、管理奴隷をおけば済むことです。番頭さんのような人に任せて、困ったことが起こった時には主人が判断する。これならば、主人は、暇があつて自由です。

ところがアレキサンダー大王の事業によって、支配領域が膨大なものになった。被支配の領域が、たいへんに大規模になった。支配も富も、拡大します。しかし、こうした規模では、すべての被支配民族をモノだというようにして押さえつけると、大規模な反乱が起きてしまいます。したがって被支配民族にも、少しは自由を与える。支配を緩やかにしなければならなくなります。まあまあ生活をさせるとか、それぞれの宗教を容認したりする、といったことです。そうしないと管理ができない。二重構造の下層の人たちに、少し自由が入り込みます。宗教によって、価値の領域も生じます。しかしギリシア人たちは、全世界に散って管理に携わらねばならない。自由が制限されることになります。巨大な支配権と富のために、自由がなくなります。管理の仕事をするために、暇がなくなり、高い価値を手に入れることが難しくなります。上層の人は、支配と富を手にしたが、自由と価値が減少し、下層の人は、自由と価値を少し手に入れたけれども、支配

されている。下層の人たちの富は、大したことはない。上層も下層も不満だ、ということになります。

アレキサンダー大王とディオゲネスの話は、こうした状況をうまく表現していると思われます。キュニコス派(犬儒派)のディオゲネスが、コリントで、樽の横に寝そべっている。そこにアレキサンダー大王が来ます。「余は大王のアレキサンダーだ」と大王が言うと、ディオゲネスは、「自分は、犬のディオゲネスだ」と対等に答える。巨大な支配権をもつ者に対して、支配権のない、乞食みたいな生活をしているディオゲネスがひるまない。大王が「お前は私を恐れないのか」と尋ねる。するとディオゲネスが「あなたはよい人間か?」と聞く。価値が、問題になっています。「余は、よい人間だ」と王は言う。ディオゲネスは「よい人間を恐れる必要はない」と答える。そこで王は、富のテーマに移ります。「何か望みがあれば叶えてやる」。寝ころがって横になっているディオゲネスは、ただ「日陰になるから、ちょっとどいてくれ」と言う。

後でアレキサンダー大王が「私がアレキサンダーでなければ、ディオゲネスになりたかった」と言ったと伝えられています。何が問題になっているのか。大王は支配と富を手に入れている。しかし自由と価値がない。ディオゲネスは支配と富は断念して犬みたいな生活をしているが、自由と価値を持っている。この4つを同時に手にすることができなくなっている。だから上層も下層も不満で、反乱がいつでも起こるような状態になっている。ヘレニズムの時代は、中小の規模の反乱などが頻発して、不安定で、皆がうんざりしていたと言われていました。そこにローマが来ます。ローマは力で秩序を維持しようしたために、歓迎されたところもあるようです。しかしローマも、不安定の要因を根本的になくすことはなかなかできなかった。

そこで、生じたのが4世紀のコンスタンチヌスによるキリスト教の国教化です。コンスタンチヌスがキリスト教を完璧に理解して、ローマの状況を完璧に理解して、こうした政策を行ったと考えるのはやはり無理



などところがあるのではないのでしょうか。さまざまな皇帝がさまざまなことをやっていて、その中でコンスタンチヌスがキリスト教を採用したらうまくいった、とまずは了解すべきかと思われま。たとえば、コンスタンチヌスが夢でみたから、ということも勉強しても、キリスト教政策がなぜうまくいったのかの理解にはあまり参考にならないと思われま。夢の話は、キリスト教政策がある程度うまくいった状態をさらに補強するためのものと了解すべきではないのでしょうか。

キリスト教が国教となるということは、どういうことでしょうか。これまでの考察の文脈に沿って考えま。神がいて、聖職者がいて、その他の人たちがいるのがキリスト教です。キリスト教は拡大していましたが、いろいろな宗教的な流れの一つにすぎなかつた。

キリスト教を国教とするということは、世俗世界の二重構造、つまり貴族と民衆の二重構造を、キリスト教の二重構造の下層のところに当てはめた、と考えることができると思われま。聖職者・貴族・民衆という、三重構造になります。聖職者が最上層にいま。それは皇帝、つまり帝国によって、世俗的に保障されています。聖職者のところに、富がどんどん入ってくる。キリスト教の立場では、救われて神に直接結ばれることが人間の自由の最高の実現です。それは、宗教的な意味で最高の価値の実現です。したがってキリスト教においては、自由と価値が実現していた。しかし富と力がなかつた。そうした意味でキリスト教は、小さな宗教運動でしかありませんでした。しかしローマ帝国の社会の枠組の中で、国教とされる、つまり公式の宗教とされることで、支配と富も加わってきたのです。西洋の社会の4つの要因の4つともが、聖職者のところで実現できたと言えることになります。

聖職者に誰がなるか。民と貴族の普通の人たちからリクルートされます。社会的な出自にかかわりありません。以前は、貴族に生まれれば貴族、民衆に生まれれば民衆とということになっていま。だか

ら不満が生じま。しかし聖職者には、民衆出身でも貴族出身でもかまわな。神に選ばれているかどうかによるので、社会的なことは関係がない。民衆出身でも貴族出身でも、聖職者になれば、理想を実現することができるわけです。残る人たちは、羊を追って、のん気に暮らすのでもよい。貴族も、楽しく夜会をやったりして、暮らしていく。中世の夜会の再現のようなものをパリで参観する機会がありましたが、なかなかエレガントで、楽しめるなと思いま。価値についても、高い宗教的価値ではなく、文化といった程度の価値で我慢できる人たちは、世俗の世界に残る。これは安定した社会です。反乱が起こらな、とは断言できませんが、以前比べれば安定した社会になる。

ところがまた大きな変化が生じま。近代です。科学技術の発展が生じま。産業革命の進展で、富が飛躍的に増大しま。今まで社会全体の富が限られていたのが、考えられなくらいのスピードで富が増大しま。富を基準にして、社会の上層になる人の割合を考えるならば、上層になれる人たちの割合が増えた、ことになりま。上層は、最初はお坊さんと貴族だけだったのですが、他の者たちも、富を獲得すれば、上層の仲間入りができるようになります。そのようにして上層に加入した最初のグループが、ブルジョワです。フランス革命が記念碑的な出来事でしょうか。その後、当時としてはプロレタリアートと呼ばれたりしていた労働者たちが、暴力革命をやったり、そうでなかつたりしま。19世紀の労働者の状況に比べれば、21世紀の状況ははるかに改善されていると言いま。このようにして上層の領域が広がってきたことが、近代の大きな流れであると思われま。

この動きは、伝統的なヨーロッパ、西洋の領域だけの出来事ではなく、これと平行して大きな事件が起こりま。ヨーロッパ世界、西洋世界の地理的な拡大です。富の増大、技術の発展、強大な軍事力を背景にして、西洋の勢力が全世界を支配する



ことが生じました。19世紀に実現したような、非西洋の世界を植民地にする形で、奴隷の領域に非西洋の世界を組み込むという動きであったということが出来ます。日本は、非西洋の国でしたが、支配の領域の側に滑り込んだ唯一の例だと思います。

ただし、非西洋世界が伝統的な西洋の勢力の支配下に組み込まれる動きは、西洋世界の内部で、もともとは奴隷的な領域にいたブルジョワとか労働者が富の増大を背景にして上層に移っている事態と平行して起こりましたから、西洋的枠組の中で非西洋の国々が奴隷的な領域に入れられてしまっている、富の部分で頑張れば、つまり経済的に成功すれば、自分たちも上層に移る可能性はあるのだということが考えられる形になっていて、その枠組みで経済を振興し産業を起こして民の生活を豊かにして奴隷的でない状況になろうと考える指導者たちも非西洋の側に出てきます。

ある程度成功している国もあると思いますけど、西洋的な枠組みが世界を支配していることを受け入れた上で、その枠組みの中で奴隷状態にいるのは嫌だから上層の自由の世界に入りたいと努力をしている。これを広い意味の「近代主義」と言ってよろしいかと思えます。

しかし世界には、西洋的社会構造のあり方しかないのではありません。異なったタイプの文明が存在しましたし、理屈としてもさまざまな社会構造の文明があり得るのではないのでしょうか。

社会構造が西洋的なものではないタイプの社会として、別のものを具体的にここでは一つだけ考えてみます。違うタイプの社会があり得るということを示すのが目的であって、世の中には、西洋的なタイプの社会と、それからもう一つしかないと主張しようとするのではありません。(冒頭で触れた、日本型、インド型、については、時間の関係で省略)。

二重構造で、しかし上が拘束されていて、下が自由である、そういう社会を考えます。伝統的な中国社会をイメージしたものです。上層は、皇帝を頂点に

して官僚たちが軍隊的な整然とした秩序をつくっている領域で、中国世界を管理している。この人たちは科挙に合格した人たちです。彼らには、支配の4つの要素のうち、富もある支配もある。価値(文化)もある。しかし自由がありません。整然とした、秩序だった管理に専念すべきで、自由に勝手にやられると困るわけです。地方にいて節度使になって、反乱を起こす人も出てきたりしますが、原則的にはこのようなことは、あってはなりません。彼らには自由がない。やるべきことをきちんとやるだけです。礼の世界です。人々のための管理をする。仁政ですね。

これに対して民は支配されているから、社会的に低い位置にある。下層の領域です。富も生きていける程度です。文化もぐっと低い。しかし自由がある。ただしこの自由は、西洋的な巨大な富に支えられたものではなく、小さな自由です。呑気に暮らせる、というような自由です。中国の土壤が豊かで、あくせくしないでも暮らせていけたから、このようなことが可能になったと言えるかと思えます。魯迅の『阿Q正伝』に描かれている主人公の生活のあり方は、こういうタイプの自由の典型的で、極端な姿ではないでしょうか。世界の名作として高校の時、この作品を読みましたが、阿Qが出てきてぶらぶらしている。ばかなことばかりやって、最後は革命騒ぎに巻き込まれて死んでしまいます。魯迅は、こういうのが当時の中国たくさんいて、これではいかんという主張を込めて書いたのではないかと思います。しかしここでの説明の文脈で考えると、何もしていない人たちがそれでも食っていける姿は、驚嘆すべきではないでしょうか。若い者が、ぶらぶらして、何とか生活できてしまう。これは社会がたいへんに豊かだということではないでしょうか。ほとんど生産しないで遊んでいて暮らせるのですから。

本当は、ただ土壤が豊かであるからばかりでなく、上層の官僚たちが支配して管理しているから平和に暮らせるのです。「山は高く、皇帝は遠い」とい





う中国の有名な諺があります。小さな村の生活にとって、中国全体の管理の問題は、関係がないかのごとくである。洛陽とかに皇帝はいるけど、関係はない。小さな幸せで、楽しく暮らすことができる。ある意味で天国みたいなところですよ。こういうところでは宗教的要因は、社会全体にとって支配的にならないと言うべきではないでしょうか。小さな幸福に満足してしまう。上の人たちは能力があり余っているけど、世俗的な社会の管理だけで宗教的なことも考える暇がない。閻魔大王の判断さえ、お役所に願うならば、変えてもらえたりします。

繰り返しますが、西洋的なタイプが唯一絶対的ではないことを示すための具体例として、こうした例を示してみました。時間があれば、その他にもいろいろと異なったタイプについての検討をすることができます。

現在の状況について、簡単に示唆したいと思います。

現在は、グローバル化が進行しております。上の人たちが管理して下の人たちは自由で楽しく暮らしていたという中国的なタイプの社会が、全世界的には優位になってくるのではないかと、というのが私の観測です。念のために確認しますが、これは中国や中国人が世界を支配するようになるという意味ではありません。中国のタイプの社会構造が支配的になるということで、上層で支配する人たちが、人種的にどのような人たちであるかということには関係のないことです。

宗教的なことは重要ではないという雰囲気が支配的になることが「世俗化」の根本的な性質だと思いますが、現代の「世俗化」の状況と、中国タイプが支配的になりつつあることとは対応していると思われれます。今の社会は、富の増大に圧倒されて幻惑されているところがあります。中国的なタイプということになると、上層が拘束され、下層が小さな自由を享受するということになります。上層の人たち

は、管理のために常に働いていて、自分の時間がない人たちです。下層の人たちは、かつては苦しい労働に長時間苦しめられてきましたが、だんだん楽になってきています。

ところで中国的なタイプの社会が可能になった条件の一つに、土地が豊かだったからということを示しました。現代の社会で、この豊かな土壌の代わりになっているのが、科学技術の進歩、産業革命の進展です。

今では科学技術の発達のおかげで、あまり働かなくてよくなってきた。このことは、これからの社会のあり方を考える上で重要だと思います。労働の問題も、労働者の社会的立場を認めると2世紀間やってまいりましたが、労働者も労働しなくてよくなってきた。チャップリンの『モダンタイムス』のベルトコンベアに隷属するような仕事をやる必要がなくなってきました。ロボットがやってしまうのです。労働の問題は、労働をしなくてすむという方向で解消してしまうこととなります。そういう方向に、無限大に近づいていきます。そうすると暇が出てきます。その時に、ほんわかした文化で皆が我慢して、野球やサッカーを見てそれで済むのかどうか。もっと本格的なものを求めて、皆が暇で、宗教のことを考え始めるかもしれません。救いのことを考えることしか残ってないと皆が考えて、全人類が宗教的問題に本格的に興味を持ったとしたらどうするか、ということを考えないといけないかもしれません。西洋的なタイプの社会における世俗の領域は、救われない人たちの領域です。しかしこのタイプの社会は、貧しさに基礎をおいています。このタイプの構造を前提にして考察することは、あまり意味がないかもしれません。今日は、いくつかのタイプについて考察はできませんでしたが、私の念頭になるいくつかのタイプの社会構造の中で、豊かさに基礎をおいているのは中国的なタイプだけであると言えるのではないかとも思われます。

富の増大が止まらない。飽和状態になる。そのときのことを、考えねばなりません。



それから「一神教的なイデオロギー」について、まとめておきます。一神教の人たちは一つの神だけ選んでいて排他的だ、というのは的外れの議論です。一神教だから排他的なのではありません。「生活スタイル」のレベルでの指導が、宗教的権威を背景にして行われているから、排他的であるような姿になると言えるでしょうか。キリスト教の場合には、「人による人の支配」がこれを行っています。ユダヤ教の場合には、「律法による支配」です。イスラームの場合には、どうでしょうか。シャリーアに注目するならば、ユダヤ教の場合の「律法による支配」に似てくると思われるのですが、これについては専門家の方々の意見を拝聴したいところです。

キリスト教の場合について。「キリスト教徒は、こういう生活スタイルをすべきだ、こういう考え方をすべきだ、これが信仰なのだ、等々」という主張が一部で目立つことは確かです。そして「それがよいからあなたもやりなさい」と人に押しつけてくるために、問題が生じてきます。しかし、ある一定の生活スタイルがよいのだとせざるをえない人たちは、神からの直接的な介入がないので、指導者たちがいいというのを、いいとせざるをえない人たちなのだ、考えるべきです。自分の教会がいいのだと、自分で選んでいる。あるいは集団で選んでいる。そうい一定の生活スタイルを絶対化するのには、神と断絶している側の力、勢力だということを認めることが重要ではないかと思えます。

それから、黙示思想で考えられたような問題について。神はこれからどう関与してくるかわかりませんが、その時にはどう対応するかということが問われてくると思えます。

また、こうした分析をしている私たちの立場を振り返ってみる必要があるのではないかと思われま。私たちは、さまざまな価値を検討して、考えることができるようになっていきます。古代や中世のように、村の長老や、どこからか派遣されてきた聖職者が言っていたことしか知らないのではなく、全世界

の情報を集めて、偉い先生が集まって議論することができる状態になっています。これもグローバル化の一面です。こうした状況では、さまざまな価値のどれかを選ぶというような議論はできない、ということまずは認めるべきではないでしょうか。目の前に、いろいろな立場があります。地球規模の社会全体としての状況が、私たちの視野に入っております。さまざまな価値を認識して、さまざまな情報を蓄積して並べていく、そうしたグローバル化した社会の状況に私たちはおかれています。これは、神のように全体を見渡して立っているという恐るべき立場なのかもしれません。そのことを認識することは、必要だと思うわけです。

社会構造の視点から分析しましたが、なぜこういう観点をとったかについて、一言のべておきます。人間は一人ひとり、社会という共同体について理解できることの量、範囲は限られています。旧約聖書における知恵の問題のように、自分で理解した範囲でこれでもいいんだということは、避けなければなりません。これまでは、人間の理解ができる範囲は個人のレベルでも共同体のレベルでも限定的であること、このことに依拠して、いろんな領域に、いろんな文明が生じてきました。限られた、個々の文明世界の「世界秩序」の考え方に対応して、さまざまな個性的な社会構造が生まれてきました。しかし今は、そういうことの全体が見渡せる時代になってしまいました。社会構造という視点から考えるならば、さまざまな違いを考慮せざるを得なくなります。さまざまな小さな了解が限定的であることを、むりなく考慮に入れることができるということが、社会構造で分析する利点ではないかと思うわけです。人間とはそもそもどのようなものかという視点は、多くの場合、自分の勝手な限定的理解を全人類に拡大してあてはめるという過ちに簡単に陥ってしまうように思われます。



## キリスト教と一神教の成立

2004年1月24日(土) 於 同志社大学東京アカデミー

千葉大学文学部 加藤隆

### 1 古代イスラエルの宗教における一神教的態度の成立 —— 出エジプト(前13世紀)から北王国滅亡(前8世紀)

一神教の基本——「人が神を選べない」

「御利益宗教的な態度」と「多神教」

「出エジプト」(前13世紀)

民族主義的なヤハウエ主義(イスラエル民族はヤハウエだけを崇拝すべきだ)では、まだ本格的な一神教ではない。

北王国の滅亡(前722年) 動かない神 「罪」「契約」

最大の課題 「神の前での義の探求」

### 2 ユダヤ教の選択 律法主義

申命記改革(ヨシア王、前7世紀後半) バビロン捕囚(前6世紀)

ペルシアの支配

「知恵」の発達 聖書の成立 神殿の再建(第二神殿)

律法主義 ディアスポラの拡大 ユダヤ戦争(後66-70年)

「神の前での義の探求」の行き詰まり

### 3 キリスト教の成立

黙示思想(前2世紀頃から) 神の側からの全面的・否定的な介入

エッセネ派の試み

キリスト教運動の発見 神の側からの肯定的な介入、しかし部分的

「神の支配」(バシレイア・トゥ・テウ) 聖霊

イエスは、神殿支配・律法支配が障害と考えた(?) 十字架事件(後30年頃)

エルサレム初期共同体 神の側からの肯定的介入の可能性に見合った生活スタイル

特定の生活スタイルが「救い」に対応するとされた

神の介入ではなく、人間の態度による救い

「イエスに従う」→イエスの神格化

生活スタイルの変化・多様化 「イエスに従う」という位置付けの維持

「教会」の成立

「イエスは神の王国を告知したが、実現したのは教会」

神的権威をもつキリスト教指導者が、「キリスト教的な生活」の神学的価値を保証

律法主義ではなく、「聖なる人」による救いの保証

「キリスト教生活」(信仰・敬虔など)を受け入れるかどうかで、人が二分される

### 4 「西洋的」社会構造とキリスト教

自由な上層と奴隷的な下層からなる二重構造



- 上層 自由な個人 支配・富・自由・高い価値（文化・宗教・真実など）  
下層 奴隷的 共同体の論理による拘束
- 大きな変化 アレキサンダー大王（前4世紀後半）  
上層 大きな支配・富 しかし自由・価値が制限される  
下層 支配・富はない 小さな自由と価値  
→ 不安定
- ローマ帝国におけるキリスト教の国教化（後4世紀以降）  
キリスト教の社会構造の世俗的部分に、「西洋的」な二重の社会構造をあてはめる
- 最上層 聖職者 支配・富（皇帝が保証）  
自由・価値（神学的）  
メンバーは世俗的出自のよらず、「神的な選び」による  
貴族・民衆で、支配・富・自由・価値について不満な者が聖職者になれる
- （世俗の）上層 貴族  
（世俗の）下層 民衆  
→ 安定

## 5 近代以降の「西洋的」世界の展開

- 「富」の増大 科学技術の発達・産業革命の進展  
「富」の基準による上層・下層の秩序の流動化  
富が支配を保証  
自由 労働（生産、富の創出活動）のよって制限される  
価値 人間の活動による価値（文化）が強調される 世俗化  
「支配」の領域の増大  
聖職者・貴族 → ブルジョワも → 「労働者」も ……
- 増大した富を背景とした「西洋的」世界の地理的拡大  
帝国主義 植民地化 非西洋世界を「下層・奴隷的領域」に組み入れる  
しかし下層にいる者には、上層に組み入れられる可能性がある  
世界化した西洋的枠組を認めて、上層に入るよう努める → 近代主義  
これは結局「富の増大」の問題 つまり科学技術の問題  
その他の「西洋的諸価値」は本質的でないかもしれない

## 6 西洋的でない構造の文明

- a 二重構造・上層が共同体的、下層が自由（中国的）  
上層 臣 皇帝を頂点とする官僚による社会全体の管理、「科挙」によるリクルート  
仁政  
下層 民 小さな自由 魯迅『阿Q正伝』  
「山高皇帝遠」  
中国の土地が豊かであったことが重要  
本格的宗教的要因は、社会全体にとって支配的にならない  
「小さな自由」だけで、人間存在は既に肯定的に位置づけられる
- b 社会全体が共同体的 客観的基準がない 共同体の存続が目的（日本的）  
「場」 場にいる者はすべてメンバー  
「いるだけ」でよい



「いる」のでなければならない  
 一つの集団にしか属せない 集団がメンバーの生活のすべてを保障  
 個々人の価値は、そのもの自体としてではなく、社会的に評価される  
 本質的な価値は、「いること」だけ  
 「同じ釜の飯を食った仲間」「人間皆兄弟」  
 集団存続のための機能的秩序（上下関係）を作る  
 上の者は社会全体に有用だから支配的になる  
 支配的立場にいる者が本質的に高い価値をもつのではない  
 「皆さんのお蔭です」  
 「人望」がなくなると、地位を失う  
 「一生懸命にやる」「頑張る」（具体的成果より、「いること」が重要）  
 集団の動向をいつも把握する必要がある 分からなければ、出席して沈黙する、  
 「いること」だけが重要なので、「仲間」を本質的に批判することはあり得ない  
 <和> <酒><忍>  
 人間存在は社会的・世俗的ではない 宗教は「忍」の領域  
 社会全体としては、「風習」「心理」(?)  
 神ないし神的現実の本質的価値がないので、「罪」もない

「二十一世紀の変革の非常に重要な切り口として「宗教性」ということがある、と私は考えている。(…) 科学技術が発達して、人間は何でも自分の思いのままに手に入るような錯覚を起しそうだが、(…) 個々の人間がそれぞれ勝手に自分の欲望を満たそうとするとどうなるのか、これらのことを解決するためには、人間にとって「宗教性」ということが必要である。」

#### c 社会全体が共同体的 各集団のメンバーのあり方は客観的に決定されている

(インド的)

「質」 (「役割」ではない)

「ジャーティ」

床屋の子は床屋 (外的にも、内面的にも)

世俗的・社会的な役割だけでなく、宗教的にもすべてが決定されている。

人生・この世は、大きな存在の中の一つの通過点

宗教的領域についても、すべてが具体的に決定されている

能力が余れば、瞑想する

すべてが安定していて、外部の要素が入り込む要素がない

#### 7 将来の動向への示唆、その他

##### ☆ 「グローバル化」

「中国的」構造の優位 世俗的 (「富」の優位に対応)

中国の豊かな土地 科学技術・産業革命による富

##### ☆ 「労働」の意味の減退

「自由」の基盤である「暇」の拡大

実現可能なものが、「小さな自由」程度で済まないかもしれない

「価値」が、「文化」程度でなく、本格化するかもしれない

西洋的・キリスト教体制も、「貧しさ」を基盤にしていた



世俗的・政治的に、宗教性を決定付けることになるかもしれない

☆ 富の増大が止まる・意味がなくなる

富の飽和 貧しさの再現 (?)

「世俗化」の状況が安定するかどうかは分からない

☆ 「一神教的イデオロギー」

世俗的に問題になるのは「キリスト教的生活スタイル」

神の直接的な介入がない者たちが、特定の「キリスト教的生活スタイル」を絶対的であると主張する。

☆ 神からの新たな介入の可能性

☆ 社会構造の観点からの分析の利点

人間の理解が限定的であることを、無理なく考慮できる。

\* \* \*

Takashi Kato, *La pensée sociale de Luc-Actes*, (coll. Etudes d'Histoire et de Philosophie Religieuses, No. 76), Presses Universitaires de France, Paris, 1997, 2, 377p.

『一神教の誕生』(講談社現代新書、G1609)、講談社、2002. 5. 20、293p.



# 新約聖書関連年表



